

文化論集第 35 号
2009 年 9 月

ペトルス・アルフォンシとイスラーム

矢 内 義 顕

はじめに

本稿は、12世紀初頭にユダヤ教からキリスト教に改宗した、スペインのユダヤ人ペトルス・アルフォンシ（Petrus Alfonsi）が執筆した『ユダヤ人との対話』（*Dialogi contra Iudaeos*）におけるイスラーム論駁を取り上げる⁽¹⁾。本書は、ユダヤ教とイスラームを論駁した書物として、ユダヤ教・イスラーム論駁史の中でも独特の位置を占めるものだが、ユダヤ教に関しては、ここでは取り扱わない⁽²⁾。

1. ペトルス・アルフォンシの生涯と著作

11世紀のスペインでは、キリスト教勢力による国土回復運動（Reconquista）が繰り返される。1085年、レオン・カスティーリャ王アルフォンソ 6 世（1030－1109年）は、イスラーム支配下のトレドを陥落させ、キリスト教圏に組み込むことに成功する。これに対し、1086年、北アフリカのベルベル系王朝であるムラービト朝（al-Murabitun）がイベリア半島に進出し、アンダルスのほぼ全土を支配下に置く。こうして、北部のキリスト教地域と南部のイスラーム地域の対立が激化する⁽³⁾。ペトルス・アルフォンシが生まれたのは、この時代である⁽⁴⁾。

イスラーム支配下のイベリア半島においては、キリスト教徒（Mozárabe）であれ、ユダヤ教徒であれ、庇護民（dhimmi）として人頭税を納めれば、その生活を保証された。さらに、彼らは、イスラームの高度な文化を受容し、哲学、自然学、法学、文学などを身につけることができた。そのため、異なる言語、宗教、文化をもつ人々が共存することにより、文化的には繁栄していた⁽⁵⁾。ペトルスがこのような環境で育ったことは間違いない。しかし、上述のムラービト朝の進出は、こうした文化に打撃をもたらす。コーランの字義通りの解釈を受け入れ、無知で野蛮で厳格な性格をもつこの王朝は、文化を抑圧し、またムスリムと非ムスリムとの交流にも嫌悪を露にした。ユダヤ人たちも公職から追放され、多くのユダヤ人がアンダルスを離れ、地中海東部やスペイン北部へと移動する。ペトルスも、あるいはその一人であったかもしれない。しかし、彼の生年についても、出生地についても不明である。

キリスト教に改宗する以前のユダヤ教徒としての自分自身について、ペトルスは、『対話』の中で、対話の相手であるモーゼスに次のように語らせている。

「私（モーゼス）は、あなた（ペトルス）が、預言者の書物そしてわれわれの賢者たちの言葉について卓越していたことを知っている。そして、少年の頃から、あなたが同輩の誰よりも律法に熱心であったことも知っている。もし（律法に）敵対する者がいたとしても、あなたは防御の楯で対抗したであろう。あなたは会堂でユダヤ人たちを教え、彼らが唯一の信仰から脱落することがないようにし、また同輩の者たちを教え、学のある者たちを進歩させた」⁽⁶⁾。

この記述から、彼がユダヤ教のラビだったとみなす向きもあるが、定かではない⁽⁷⁾。しかし、彼自身の言葉に多少の誇張はあるとはいえ、少なくとも、彼が、当時のユダヤ人の中であって、預言者の書（旧約聖書）とラビ文献（タルムード）についてかなりの知識を有する者として知られていたことは確かであるし、言語的にもヘブライ語、アラビア語、ラテン語に堪能であり、また別の箇所から、自由学芸、自然学、医学そしてイスラームに関しても少なからぬ知

識を有していたことも明らかである。

キリスト教への改宗については、彼自身次のように述べている。

「私は、ウエスカ（Huesca）の司教座において、父と子と聖霊の御名により、洗礼を受け、この町の栄えある正当な司教ステファヌスの手によって清められた。…これが執り行われたのは、主の1106年、[イスパニア暦の1144年6月]、聖ペトロと聖パウロの祝日であった。それゆえ、使徒ペトロへの崇敬から、彼にちなんで、ベトルスと名づけられた。私の代父は、イスパニアの栄光ある皇帝アルフォンソ（1世）であり、陛下が洗礼盤から私を取り上げて下さった。このため、私は陛下の名を、上述の栄えある名の後に加え、ベトルス・アルフォンシイと名乗ることにした」⁽⁸⁾。

彼が洗礼を受けた場所は、アラゴン王国の首都ウエスカである。この町はアラゴン王サンチョ・ラミーレスにより1096年イスラームの手から奪還された。その息子が、ここで誇張して「イスパニアの栄えある皇帝」と呼ばれているアルフォンソ1世（在位1104－34）年である。彼は、29の戦いに勝利し、武人王と呼ばれたが、1134年に戦死する。洗礼日が使徒ペトロの誕生の祝日であったこと、そしてこの洗礼に立ち会ったのがアルフォンソ1世であったことから、彼は、ベトルス・アルフォンシイと名乗ることになる。改宗以前の彼の名はモーゼスであったと思われる⁽⁹⁾。

ベトルスが洗礼を受けた年は、西暦1106年、イスパニア暦1144年（前38年、ローマのイスパニア併合から計算）である。改宗の真の動機は分からないが、彼の改宗を知ったユダヤ人たちの中には、キリスト教世界での栄達を目的としたのだと非難する者たちもいた⁽¹⁰⁾。キリスト教徒の中にも同様の疑念を抱いた者たちがいたであろう。こうした者たちの批判に答えるために、彼は、洗礼の後（1108－1110年）、『ユダヤ人との対話』を執筆する。ただし、本書がラテン語で書かれたことからすると、実際の読者はキリスト教徒であった。

受洗後、彼は、王の侍医を務めたが、1106－1116年のどこかでイングランド

に渡り、国王ヘンリー1世（1068–1135年）の宮廷に仕える。国王の侍医を務めた可能性もある。また、彼はこの地で天文学の講義をする。彼の指導の下に、マルヴァーン（Malvern）修道院の副院長ヴァルケルス（Walcerus, Walcher）が『龍について』（De dracone）という小論を著す。これは、蝕計算に必要な天体運動を論じたもので、「龍」（draco）とは、月の昇降交点を示すインド–アラビア天文学の術語である。また、彼はこの滞在中にウェストミンスター修道院長ギルベルトゥス・クリスピヌス（Gilbertus Crispinus 1046年頃–1117年）と出合った可能性もある。クリスピヌスは『ユダヤ人との討論』（Disputatio Iudaei）および『異教徒との対話』（Disputatio cum gentili）を残しているが⁽¹¹⁾、これらが執筆されたのは1093年以前のことであって⁽¹²⁾、アルフォンシイの影響を受けることはなかった。

さらに、1116年には、アラビア語の天文学に関する文献も翻訳する。すなわち、9世紀のアル・フワーリズミー（Al Khwārizmī）が執筆した『天文表』（Zij-Al-Sindhind）である⁽¹³⁾。この後、彼は北フランスに渡り、ここでも天文学を中心としてアラビア科学の講義を行ない、占星術を擁護する『逍遙学徒への書簡』（Epistola ad peripateticos）を執筆する⁽¹⁴⁾。この後、彼は、スペインに戻ったと思われるが、歿年は不明である⁽¹⁵⁾。

彼の著作としては、上記の他に、スペインのユダヤ人のあいだで伝承された寓話を編集した『知者の教え』（Disciplina clericalis）があり、中世において広く読まれた⁽¹⁶⁾。

2. 『ユダヤ人との対話』について

次に本書の形式、方法、主な内容について述べておこう。

本書は、『対話』という表題が付けられているとおり、ペトルスとモーゼスとの対話形式で書かれている。後者は、ペトルスの友人であり、若い頃からの生徒であるとされているが、架空の人物、あるいは、改宗以前のペトルスの名

がモーゼスであったことから、改宗以前の彼自身と考えてよいだろう。執筆の動機については上述のとおりである。

本書で採用される方法について、「私は、すべての人が私の（改宗の）意図を知り、私の論証に耳を傾けてくれるようにと、この小著を執筆したが、この論証において、私は他のすべての民族の信仰の破滅を説明した後、キリスト教の法が他のすべてに優ることを結論した。さらに、キリスト教の法に対立する者たちの反論のすべてを打ち負かし、そして打ち負かした上で、私の理解にしたがって理性と権威によってそれらを破壊した」⁽¹⁷⁾と述べている。本書は、理性と権威に基づいて論証がなされる。ここで権威というのは、もっぱら旧約聖書である。なぜなら、キリスト教徒もユダヤ教徒も共通の権威としてこれを受け入れることができるからである。

この権威に関して、対話の相手モーゼスは次のような提案をする。「もしよかったら、次のこともお願いしたい。すなわち、もしあなたが聖書から何らかの権威を引き合いに出すなら、ヘブライ的な真理に従ってそれを選択することである。というのも、もしあなたが他のことをするならば、私がそれを受け入れないだろうということは、あなたも承知している。他方でまた、私がわれわれのもっている真理の道に従って何らかの（権威）を提示するならば、あなたも決してそれに反論することなく、それを受け入れ、真理として認めてもらいたい」⁽¹⁸⁾。ここで「ヘブライ的な真理」と言われるのは、ヘブライ語原典に見出される聖書のテキストとユダヤ教の解釈者によってなされた解釈のことを意味する⁽¹⁹⁾。モーゼスはこれを共通の権威の源泉として提案するのである。

これに対して、ペトルスは、「それには全く異論がない。というのも私は、あなた自身の剣であなたを殺そうと切に望んでいるからである」⁽²⁰⁾と答える。物騒な発言だが、いずれにせよ、本書においては、旧約聖書のヘブライ語原典とラビ文献がしばしば取り上げられ、理性的な論証の吟味にさらされる。しかし、本稿ではイスラーム論駁を取り上げるため、このことについて具体的に論

じることはない。

全体は12の「論題」(Titulus)に分けられる⁽²¹⁾。その内容は、I-IV:ユダヤ教論駁, V:イスラーム論駁, VI-XII:キリスト教の基本的な信仰に関する理性的論証の三部に分けることができる。主な内容は以下のとおりである⁽²²⁾。

第一部では、ユダヤ人たちが預言者の言葉(旧約聖書)を肉的に解釈し、誤った説明をしていること、とりわけ、神が身体をもっていると理解していること(I)、ユダヤ人たちの現在の捕囚状態の原因とそれがいつまで続くのかということ(II)、ユダヤ人たちの復活信仰に関する過ちおよび復活後にこの地上に住むと信じていること(III)、彼らがモーセ律法のすべてを遵守しているのではなく、その一部を守っているに過ぎないこと(IV)という諸点が論駁される。

第二部では、イスラームが取り上げられる。これについては、後に詳述する。

第三部では、キリスト教信仰について「理解されるべきことがらとそれによって信ずべきことがら」⁽²³⁾に関する理性的な論証がなされる。すなわち、三位一体論(VI)、マリアの処女懐胎(VII)、神の言葉の受肉と二性一位格(VIII)、キリストの到来は預言者によって預言されていたこと、またそれらの預言は彼の言葉と業において成就したこと(IX)、キリストは自らの自由意志で、ユダヤ人たちによって十字架に付けられたこと(X)、キリストの復活と昇天および再臨(XI)、最後に、キリスト教の法はモーセ律法に対立するものではないこと(XII)、以上である。三位一体論からキリスト論そして倫理的問題にいたるまで、キリスト教信仰の基本が取り扱われる。このキリスト論においては、キリストが三つの実体、すなわち肉体、魂、神性からなる神一人であるという彼独特の理解や⁽²⁴⁾、キリストの肉体も神の似姿(imago Dei)であるという興味深い見解も登場する⁽²⁵⁾。

彼がこれらの箇条を「理解されるべきことがら」そして「それ(理解)によって信ずべきことがら」と述べている点については、多少説明を必要とするであろう。確かに、信仰と理性については、いずれが先行するのかという点は中世

哲学の主要なテーマの一つではある。ここでは、文字通り理解が先行し、それに信仰が続くことになる。だが、ペトルスは、ここで恩恵と信仰と理解に関する本質的な問題を述べているのではない。むしろこの発言は、本書の護教的な意図を表明したものと考えることができる。すなわち、ユダヤ教とイスラームの信仰を論駁し、キリスト教に対するユダヤ教の側からの批判に答え、キリスト教の信仰へと導くという意図である。この観点からするならば、まずキリスト教信仰に関する基本的な理解が先立つことは言うまでもなからう。

3. 『ユダヤ人との対話』におけるイスラーム論駁

(1) 本書においてイスラームが取り上げられる理由

これまで述べたことから分かるように、本書の内容は、ユダヤ教論駁を中心とするものではあるが、その中でイスラームも取り上げられる。なぜ、ペトルスはイスラームを取り上げねばならなかったのか。

「論題V」の冒頭で、対話の相手モーゼスは、ペトルスにこう問いかける。「あなたが父祖たちの信仰（ユダヤ教）を棄てたときに、なぜあなたは、サラセン人たちの信仰よりもキリスト教徒の信仰を選んだのか…。あなたは、常に彼らと交際し、彼らの間で生まれ、（彼らの）書物を読み、言語を理解しているからである」⁽²⁶⁾。

ペトルスが、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人の共存する社会で育ち、アラビア語を解し、またイスラームの自然学、天文学（占星術）、医学に関する知識を有していたことは、上述のとおりである。当然、彼は、宗教としてのイスラームを知らないわけではなかった。実際、彼のイスラームに関する知識は、当時の西ヨーロッパの水準からすると群を抜いていたことが、以下で明らかになるだろう。だとするならば、どうして、キリスト教を選択し、イスラームを選択しなかったのか、それがモーゼスの疑問の一つである。しかし、それだけではない。モーゼスはさらに言葉を続ける。「彼ら（サラセン人）の法は寛大

である。それは、現世の快樂に関する多くの命令を含み、まさにそのことによって、彼らに対する神の愛が最大であったことが示されている。同様に、この法の信奉者たちには、えも言われぬ歡喜が約束されている。もし、あなたがこの法の根本を探求するならば、それが理性の揺るぎない基礎の上に建てられていることを見い出すだろう」⁽²⁷⁾。

ここで、イスラームの法（コーラン）が寛大であること、現世と来世での快樂を約束していること、そして何よりもそれが「理性の揺るぎない基礎」に基づいていることが主張される。本書は、ここにいたるまで、ユダヤ教がどれほど非理性的であるかを明らかにしてきた。もしイスラームが理性的であるならば、どうして、イスラームを選択しなかったのかという疑問が提出されているのである。こうして、ペトルスとモーゼスの対話が開始するが、その際、モーゼスはムスリムの役割を演じることになる。その内容に進もう。

(2) 宗教としてのイスラームに関する情報

モーゼスは、まずイスラームに関する基本的な事柄を、かなり正確に列挙する。それは、唯一神教、預言者ムハンマド、日に五回の礼拝、モスクに入る前の洗浄、年に一度の断食月、メッカ巡礼、カアバ神殿の起源、モーセの律法との関係、食物規定、飲酒の禁止、一夫多妻と離婚に関する規定、姦淫に対する罰則、官能的な樂園（天国）、不信者の取り扱いなどである。

今日のわれわれにとっては、イスラームの一般的常識であるが、12世紀初頭の西欧キリスト教世界では、例えば『ロランの歌』に代表されるように、イスラームがムハンマドをはじめとする神々を拝む多神教・偶像崇拝者と見なされていたのだから⁽²⁸⁾、この情報は貴重である。幾つかの例を挙げておこう。

「…（神は）人々に日に五回だけ祈ることを命じ、祈る前には常に清浄さを保ち、尻、陰部、手のひら、腕、顔、口、鼻、耳、目、頭髮、齒、そして足のつま先まで洗うようにと命じたことが記されている。このように行なった後

に、神は唯一であり、他のいかなる神もなく、彼に似たもの、彼に等しいものはないこと、ムハンマドは神の預言者であることを告白することが布告されている」⁽²⁹⁾。ここでは、日に五回行なわれる礼拝とそれに先立つ浄め、さらに神が唯一であることとムハンマドがアッラーの預言者・使徒であるというイスラームの信仰告白（シャハーダ shahâda）について述べられている。浄めについては多少誇張があるのかもしれないが、これらは、ペトルスが日常的に目にしていたことであろう。

断食（ラマダーン）については、次のように述べられている。「また、彼らは、一年の内まる一ヶ月間、断食をする。断食する者たちは、夜は食事をするが、日中は控えるので、白糸と黒糸を見分けることができない時間から日没までは誰も飲み食いせず、妻との交わりによって身を汚すこともしようとはしない。だが、日が没した後、翌日の黎明までは、欲するままに飲み食いすることも、妻と交わることも許されている。ただし、病気を患っている者、旅行中の者は、病気や旅が続く限り、欲するままに食べることも樂をすることも許されているが、病気や旅などのやむをえない事情が解消した後に、できるときにその埋め合わせをする」⁽³⁰⁾。断食についてコーランは次のように規定する。「ラマダーンの月こそは、人類の導きとして、また導きと（正邪の）識別の明証としてクルアーンが下された月である。それであなたがたの中、この月（家に）いる者は、この月中、斎戒しなければならない。病気にかかっている者、また旅路にある者は、後の日に、同じ日数を（斎戒する）。…あなたがたは斎戒の夜、妻と交わることを許される。かの女らはあなたがたの衣であり、あなたがたはまたかの女らの衣である。アッラーはあなたがたが自ら欺いているのを知っておられ、不憫におもわれ、あなたがたを許された。だからかの女らと交わり、アッラーが定められたところに従え。また白糸と黒糸の見分けられる黎明になるまで食べて飲め。その後は日暮れまで斎戒を全うしなさい」⁽³¹⁾。この箇所と上述のペトルスの記述を比較すると、彼の報告がかなり正確なものであることが明

らかとなる。

カアバ神殿の起源については、イスラームの伝承—アダムに由来すること—およびコーランの記述と一致し⁽³²⁾、メッカ巡礼については、「また同時に、毎年、すべての人が自己吟味のために神の家—それがメッカにあると見なされている—に行くことが命じられており、彼らは、そこを詣で、縫い目のない服を着てそこを回り、法の命じるままに、悪魔を石打つために足の間から背後に投石するのである。…」⁽³³⁾と述べられる。巡礼月8日に行なわれるカアバ神殿を左回りに7周するタワーフ儀礼と、10日にミナーで行なわれる三本の悪魔の石柱への投石、この投石の仕方についての記述に混乱が見られるとはいえ、「縫い目のない服」（イフラム）についての記述は正しい⁽³⁴⁾。

官能的な樂園については、イスラーム論駁文書で好んで取り上げられ、かなり誇張されて語られることもあるが、ペトルスの記述は、コーランとほぼ一致している⁽³⁵⁾。しかし、この樂園について最後に次のように記されている。「これらの善きものは、信じる者たちに与えられることになるが、神とその預言者ムハンマドを信じない者たちに関しては、終わることのない地獄の刑罰が待っている。だが、罪に縛られている誰であれ、それがどれだけ多くても、その死に際に神とムハンマドを信じれば、裁きの日にムハンマドの執り成しによって救われることになるう」⁽³⁶⁾。この最後の審判におけるムハンマドの仲介については説明を必要とする。コーランは「あなたは主に召されることを恐れる者に、それ（クルアーン）によって警告しなさい。かれ（アッラー）の外にかれらを愛護するものも、執り成すものもないのである」⁽³⁷⁾と述べて、アッラー以外の執り成し手を否定しているが、アシュアリーをはじめとするイスラーム正統神学はこれを認め—ムウタズィラ派は否定する—罪を犯した者は、一度は地獄の劫火で焼かれるが、ムハンマドの執り成しによって火中から救い出されると考えている⁽³⁸⁾。ペトルスの記述もこのことを述べているのである。

以上、イスラームの基本的な知識が提示された後、ムハンマドが取り上げら

れる。

(3) ムハンマド批判

イスラームの論駁においては、ムハンマドが偽預言者であると批判するのが常套手段である。ペトルスは、真の預言者の条件として「生活の廉直、奇跡の發揮、すべての教えが確固たる真理であること」の三点を挙げ⁽³⁹⁾、それに従ってムハンマドの批判を展開する。ここで、彼が依拠しているのは、ムスリムのアル・ハシミーとキリスト教徒のアル・キンディーの往復書簡として9世紀に東方で成立した護教論『アル・キンディーの書簡』(Risālat al-Kindi)であると思われる⁽⁴⁰⁾。

周知のとおり、預言者として登場する以前のムハンマドについては、極わずかのことしか知られていない。両親が早くに亡くなり、孤児となった彼を叔父が育てたこと、商人としての経歴を積む中で、年上の富裕な未亡人ハディージャにその商才を認められ、結婚することなどである。本書もこうしたことを述べた後、彼の生涯を以下のように描く。富を得たムハンマドは傲慢になり、アラブ人たちの王となる野心を抱く。しかし、それでは彼の過去を知る近親者たちを納得させることができないと考え、預言者を偽称することを思いつく。このムハンマドに知恵を貸したのが、ヤコブ派の異端として公会議で断罪されたアンティオキアの助祭長セルギウス (Sergius) である⁽⁴¹⁾。さらに、アブディアス (Abdias) とカバラハバル (Chabalahabar) という名の二人の異端的なユダヤ人がムハンマドと結託する。従って、イスラームの教説は、キリスト教からしても、ユダヤ教からしても異端的な教えを含むことになるのである。こうしてムハンマドは、偽預言者として活躍することになる。当然、彼の生活は「廉直」に反するものとなる。

「ムハンマドにとって善い生活とは暴力であり、それによって彼は自分が神の預言者であることを力ずくで周知させるようにした。彼は窃盗と強奪を喜ん

だ。彼は情欲の炎に燃え上がり、恥知らずにも、神の命令を口実にして、他人の結婚の床を汚したのである。イアスの姉妹で、ザイドの妻ザイナブについて、彼は、『神はお前（ザイド）に妻を離縁せよと命じている』と（ザイド）に告げる。そして、ザイドが妻を離縁すると、ムハンマドは彼女と交わりを繰り返した⁽⁴²⁾。このムハンマドの養子であったザイドの妻ザイナブとムハンマドの結婚については、彼と同時代の人々によっても非難され、当然、イスラーム論駁書において、彼の性的な放埒を批判する場合に、引合いに出される事件である⁽⁴³⁾。ペトルスは、この他に、彼の妻アーイシャに関わる醜聞⁽⁴⁴⁾やムハンマドの性的な欲望が通常の人間の40倍もあったことなどを述べる⁽⁴⁵⁾。

また、ムハンマドが死後三日目に復活することを預言したが、成就しなかったこと、彼の屈辱的な死というテーマも、イスラーム批判文書でしばしば取り上げられるが⁽⁴⁶⁾、ペトルスもこれを取り上げる。

「ムハンマドの死後、誰もが彼の掟を放棄しようとした。彼自身が語ったところによると、彼の死体は三日後に天に挙げられるとのことであった。これが嘘であることに気づき、彼の死体が腐敗していくのを見た時、彼は埋葬され、多くの人々が彼の掟を放棄した。アブー・ターリブの息子で、ムハンマドの十人の仲間の一人アリーは、ムハンマドの死後、彼の王国を継いだ。彼は、人々に信じるようにと、冷静に語り、勧めた。そして、人々がムハンマドの言葉を正しく理解していないとし、次のように語った。『ムハンマドは、埋葬前に、あるいは人々が見ている中で復活すると言ったのではない。むしろ、彼は、死体の埋葬後、誰にも知られないように、天使が天に運ぶだろうと言ったのだ。それゆえ、人々が彼をすぐに埋葬しなかったため、彼の体は腐敗し始めたのだ。だから、彼をすぐ埋葬すべきであった。』こうして、アリーは、人々をしばし誤魔化したのである⁽⁴⁷⁾」。

この記述が依拠するのも、『アル・キンディーの書簡』である。ここでは、ムハンマドが復活に失敗したこと—これによって彼が偽キリストであることが

暗示されている一、そして彼の後継者であり、第4代カリフであるアリー（在位656-61年）がそれを誤魔化したことを述べ、イスラームがムハンマドのみならず、彼の後継者においても虚偽に満ちていることを明らかにしようとしたのである。さらにベトルスは、次のように述べる。

「ムハンマドの書記の息子で、ハサンとフサインという名の二人の兄弟は、断食と徹夜の苦行で身体を痛めつけ、死に瀕するまでになった。彼らの父親（アリー）は、そのような長期間の苦行で彼らの身体を衰弱させることがあってはならないと強い警告を与えた。そして、彼らがどんなに愚かで、また過度の衰弱で死の入口にまできているのを見て、父親は、こういうことに関してムハンマドがどのようなだったかを彼らに明らかにした。父親からムハンマドの邪悪な振る舞いのことを聞いて、彼らは、飲み食いを始め、以前にもまして彼らの古来の掟に固執するようになった。そして最後には、（ムハンマドの）法を棄ててしまった。ただし、すべてを捨て去ったわけではない。しかし、人々の中には、彼らの慣習に従う者たちもいた」⁽⁴⁸⁾。

ここで、名を挙げられているハサン（625頃-70頃）とフサイン（626-80年）は、アリーと預言者ムハンマドの娘ファティマとの間に生まれた子供である。アリーは、上述のように、第4代カリフとなったが、殺害される。ハサンはその後を継いでカリフとなるが、シリアのウマイヤ家のムーアウィヤ（680年歿）との抗争でその位を放棄し、メディナで安逸な生活を送ったと言われる。その弟のフサインは、やはりウマイヤ朝との抗争の中で殺害される。この一連の出来事は、後にシーア派とスンナ派（スンニ派）を生み出すことになるのだが、ベトルスの報告はこのことを述べていると思われる。むしろ、ここでのベトルスの意図は、過度な禁欲的な修行をしていたハサンとフサインが、ムハンマドの放埒な行ないを知り、禁欲主義を放棄して、さらには党派分裂を起こしたと言いたいのである。

上述のように、ベトルスは預言者の資格の第二点として奇跡を行なうことを

挙げていた。しかし、旧約聖書の預言者たちの中にも、エレミヤ、オバデヤ、アモス、ホセアのように奇跡を行なわなかった者たちがいる。この点を対話の相手モーゼスが指摘する。この疑問に、ペトルスは、新たな律法を導入しなかった預言者もしくはモーセの教えと矛盾することのなかった預言者の場合、奇跡を必要とすることがなかったと答える。しかし、モーゼスは、ノアやアブラハムは新しい戒めを神から受け取ったが―犠牲、肉食、割礼、その他の儀式―奇跡を行なわなかったと反論する。これに対して、ペトルスは、彼らの預言はモーセによって確証されているから問題ないと応じる⁽⁴⁹⁾。このように、奇跡を行なわなかった旧約の預言者に関する弁証を行なった後、ムハンマドの奇跡の問題に入る。

モーゼスは、イスラームにおいて伝承されているムハンマドの奇跡を列挙する。例えば、ドレゲレ (Doregele = Darikh) という名の雄牛あるいは月がムハンマドを預言者と宣言した話、イチジクの樹がムハンマドの所に近づいてきて、彼がその果実を食べたこと、毒殺を見破ったことなどの話である⁽⁵⁰⁾。これらの逸話について、その一つ一つを検討することはここでは省略する。

ペトルスはこれらの話を「下らないもの」(frivola) とする。その根拠として、ペトルスは、それらがコーランに記されていないこと、またコーラン自体もムハンマドに奇跡を行なうことを禁じていることを挙げる。コーランという最大の奇跡を除くと⁽⁵¹⁾、ムハンマドが奇跡を行なわなかったことは、イスラームも認めることである。ただし、ペトルスがコーランの一節として引用する「主は私 (ムハンマド) に言われた。あなたが奇跡を行なうことを私が許さなかったのは、他の預言者と同様にあなたにも不利なことが降りかからないかと恐れるからである」⁽⁵²⁾という言葉は、文字通りにはコーランに見い出されない。おそらく、コーラン「17夜の旅章」59の「われが印を下すことを控えるのは、昔の民がそれを偽りであるとしたからに外ならない。われは以前にサムードに、明らかな印の雌ラクダを授けたが、かれはそれを迫害した」と対応すると思われ

る。

以上、ムハンマドの生活、彼の死と死後の党派分裂、そして彼が奇跡を行なわなかったことから、彼の偽預言者性が明らかにされるが、三点目の「すべての教えが確固とした真理であること」についてはどうであろうか。この点は、すでに彼がセルギウスと二人の異端的なユダヤ人から教えを吹き込まれたことから明らかとなっているとも言えるが、ペトルスは、さらに、冒頭でモーゼスが述べたイスラームの法が「揺るぎない理性の基礎」⁽⁵³⁾の上に建てられているという主張を取り上げることになる。

(4) イスラームの法は理性的か

ペトルスは、モーゼスが最初に挙げた、一日五回の祈り、それに先立つ身体洗浄、そしてメッカ巡礼を取り上げて批判し、さらにコーランそのものの矛盾を指摘する。ここでは、メッカ巡礼とコーランの矛盾の二つを取り上げることにしよう。

メッカ巡礼に関するペトルスの批判には、いささか奇異な感じを受ける。「ロトの二人の息子、アンモンとモアブは、この（神の）家を崇敬しており、そこに二体の偶像が彼らによって運び込まれた。一体は白い石で、もう一体は黒い石でできていた。一方の名、すなわち黒い石の方は、メルクリウス、他方の名はケモシュである。黒い石の像は、土星を讃えるために立てられ、白い石の像は火星を讃えるために立てられた。これらの信奉者たちは、年に二回この偶像に祈りを捧げるためにやって来た。…彼らは香を焚き、裸で、頭を剃っていた。これは、今日もインドで行なわれている。実際、アラブ人たちは、アンモンとモアブといっしょに偶像を崇拝していたのである。時が経ち、ムハンマドが登場したが、彼は、この古い慣習を除くことができず、この慣習に変更を加え、彼らが縫い目のない衣服を着てこの家の周りを回るようにさせた。しかし、偶像に犠牲を捧げることを命じていると思われることがないように、彼

は、この家の隅に土星の像を据えたが、その顔の面が現れないように、その背面が出るように据えたのである。もう一つの偶像は、円い彫刻だったので、それを地面に置き、その上に石を載せた。祈るためにそこに来る人々に、彼は、これらの石に口づけをすることを命じ、また頭を剃って、身をかがめ、足の間から背後に石を投げることを命じた。身をかがめることによって、彼らは自分たちの背面を露わにするが、これは元来の決まりの名残である。』⁽⁵⁴⁾

周知のとおり、メッカ巡礼 (hajj) はヒジュラ暦第12月の上旬から中旬にかけて行なわれる。ただし、この期間とは別に任意に行なわれるウムラ ('umra = 小巡礼) もある。ペトルスが、「年二回」巡礼が行なわれるとしているのは、このことを指していると思われる。上述のように、彼の記述にはタワーフ儀礼と悪魔の石柱への投石、この投石の仕方についての記述に混乱が見られるし、足の間から背後に投石を行なうという習慣はイスラームの伝承にはない。しかし、巡礼の際の一連の行程にイスラーム以前の儀礼的要素も取り入れられていることは、今日の研究でも明らかであるし⁽⁵⁵⁾、そのことが、すでにムハンマドの在世中にも疑問視されたことはイスラームの伝承に示されるとおりである。『ハディース』の中には、「石に口づけをすること」に関して次のような伝承が記録されている。「アービス・ブン・ラビーアによると、ウムラは黒い石のところへ行行ってそれに接吻し、『わたしはお前が人に益も害も与えることのできない石にすぎないことを知っている。もし預言者がお前に接吻するのを見なかったなら、わたしはお前に接吻しないであろうに』と言った」⁽⁵⁶⁾。ペトルスもこの伝承を知っており、この慣習の非合理性を示すものとして、ほぼ同じ内容を本書に記している⁽⁵⁷⁾。

ペトルスのメッカ巡礼に対する批判は、ムハンマドがイスラーム以前の偶像崇拝と妥協したという点にある。しかし、旧約聖書のロトの息子アンモンとモアブ (創世記19: 36-38) に由来するとされる、カアバ神殿の黒い石 (メルクリウス) と白い石 (ケモシュ)⁽⁵⁸⁾、さらに前者が土星崇拝、後者が火星崇拝

に結び付けられている点は、イスラームの伝承にはなく、今日では失われてしまった、スペインのユダヤ人たちによるイスラーム批判の伝統に依拠するものと思われる⁽⁵⁹⁾。

次にコーランの矛盾に関する批判だが、ペトルスが取り上げるのは、力ずくの改宗に関する問題である。

「ムハンマドは、神に敵対する者たちが信じるか、貢納を納めることを決断するまで、略奪し、虐殺することを命じたが、これは神の業でもなく、またいかなる預言者たちであれ信じることを強制するように命じた者たちはいなかった。しかし、彼は、金銭への欲望から、彼の敵たちを滅ぼすために自らこのことを命じたのである。ご承知のように、こうしたことはなされるべきではない。むしろ、もし人が誰か他の人を改宗させたいと望むのであれば、暴力によってそれをすべきではなく、ムハンマド自身が彼のコーランの中で主になり代わって『もし主が望まれるなら、世界中のすべての民が信じるようになるだろう。なぜ、あなたは信じるように強いるのか。神の意志によらないならば、誰も信じることはないからである』と証言しているように、注意深く、優しくすべきである」⁽⁶⁰⁾。

コーランは「9 悔悟章」29において「アッラーも終末の日も信じない者たちと戦え。またアッラーと使徒から、禁じられたことを守らず、啓典を受けていながら真理の教えを認めない者たちには、彼らが進んで税〔ジズヤ〕を納め、屈服するまで戦え」と述べている。上述の引用文の前半はこの箇所を指していると思われる。これに対して、改宗は暴力によってはならないと言われている「10 ユーフス章」99-100が引用される。参考のためにこの箇所の邦語訳を記すと「もし主の御心なら、地上の凡ての者は凡て信仰に入ったことであろう。あなたは人々を強いて信者にしようとするのか。アッラーの許しがなければ、誰も信仰に入ることは出来ないからである」となっており、ペトルスの引用するラテン語訳がかなり原文のコーランに忠実であることが判明する。さらにペト

ルスは、同様に強制的な改宗を禁じるコーランの章句、すなわち「10ユーフス章」108-109, 「11フード章」118, 「2雌牛章」256, 「29蜘蛛章」46, 「109不信者たち章」1-4, 6を引用し、コーランの矛盾を指摘する。

このペトルスの指摘に、モーゼスは、「コーランの書はより後の規定がより先の規定を廃止している」と述べる。それに対して、ペトルスは「コーランはムハンマドの手によって書かれたものではない。もしそうだったら、順序よく書かれたであろう。事実、彼の死後、彼の仲間たちが、いわば各々の独自の読み方に従って編集したため、結果として、どれがより先の規定であり、どれがより後の規定であるか、われわれには分からなくなっているのである」⁽⁶¹⁾と答える。

実際、コーランは、ムハンマドの生前、彼の言葉と神の言葉とが混同されることを避けるために、公式にはそれを記録することが禁じられていた。しかし、彼の死後、文書化が行なわれる。イスラームの伝承によると、最初の『コーラン』の編集は、初代カリフ、アブー・バクル（在位632-34）の命令によって、ムハンマドの書記の一人ザイド・イブン・サービトが行なう。第二回目は三代目カリフ・ウスマーン（在位644-56）の時代である。こうした、『コーラン』の編集に関して、現代の研究は様々な説を提出しており、『コーラン』が、現在の形を取るまで複雑な過程を経なければならなかったことは確かである。ペトルスの述べることも間違いではない。彼がコーランの矛盾の原因をその編集に求め、各々の章（スーラ）の配列が、時間的な順序によるのではないことを指摘している点は興味深い、いずれにせよ、彼はここでコーランが真正の預言ではないことを明らかにしたいのである。

結 語

本書の意義は、イスラーム支配下の12世紀のスペインで生活し、アラビア語に堪能で、イスラームの学問に精通した知識層のユダヤ人が、イスラームの情

報を西欧ラテン世界にもたらした点にある。12世紀以前の西欧世界がもっていたイスラームに関する知識と比較した時、その情報の正確さは群を抜いていたと言えよう。また、彼のイスラーム批判が、アル・キンディーの書を利用することで東方世界のイスラーム批判を取り入れているだけでなく、当時のスペインのユダヤ人が抱いていたイスラーム観を反映していることは、きわめて興味深い点である。この点については、さらに詳細な研究が必要となろう。

本書は、中世におけるユダヤ人論駁書として最も広く読まれた書物の一つである⁽⁶²⁾。上述のギルベルトゥス・クリスピヌスの『ユダヤ人との討論』の場合、現存する写本は35、その大部分が12世紀に作成されたのに対し、本書の場合は、現存する写本が79、作成年代も12世紀から16世紀まで及んでいることは、本書に対する関心が持続していたことを物語っている。むしろ、その関心は様々であった。例えば、12世紀のサン＝ヴィクトール学派は、本書を旧約聖書解釈の手引きとして活用する。上述のように本書が「ヘブライ的な真理」に基づいて執筆されているからである。同じく12世紀のペトルス・ウェネラビリスは、1143年に執筆した『ユダヤ人たちの根深い頑迷さを駁す書』(Adversus Iudaeorum inveteratam duritatem)において、タルムードを引用する際に本書に依拠した可能性がある。13世紀のロバート・グロステスト(1170頃–1253年)は、イスラームの自然学の源泉として本書を利用する。もちろん、イスラーム批判・論駁の源泉としても活用されたことは言うまでもない。最後に、13世紀のヤコブス・デ・ウォラギネによる聖人伝の集大成とも言うべき『黄金伝説』(Legenda Aurea)の「教皇聖ペラギウス」では、ペトルスの記述の一部が採用されていることも記しておこう⁽⁶³⁾。

注(1) テキストは、P. L. 157, cols. 535-672に収録されているが、校訂版として *Der Dialog des Petrus Alfonsi: seine Überlieferung im Druck und in den Handschriften Textedition*. Herausgegeben von Klaus-Peter Mieth. Inaug. Diss. der Freien Universität Berlin, 1982を使用し、頁数もこれに拠るが、P. L. 版の欄も併記する。このテキストにスペイン語対訳を付した *Diálogo contra los Judios*. Translated by Esperanza Ducay. Edited by Klaus-Peter Mieth. Huesca: Instituto de

- Estudios Altoaragoneses, 1996が出版されているが、手に入れることができなかった。英訳としては *Petrus Alfonsi, Dialogue against the Jews*. Translated by I. Resnick, The Catholic University of America 2006がある。
- (2) この点については、cf. A. S. Abulafia, *Christians and Jews in the Twelfth-century Renaissance*, London 1995; J. Cohen, *Living Letters of the Law: Ideas of the Jew in the Medieval Christianity*, University of California Press 1999.
- (3) Cf. M. ワット『イスラーム・スペイン史』黒田壽郎・柏木英彦訳、岩波書店、1976年、pp. 121-130; D. W. ローマックス『レコンキスター中世スペインの国土回復運動』林邦夫訳、刀水書房、1996年、pp. 35-128.
- (4) 以下の記述は、J. Tolan, *Peter Alfonsi and his Medieval Readers*, University Press of Florida 1993, pp. 3-11; Charles Burnett, 'The Works of Petrus Alfonsi: Questions of Authenticity', in *Medium Aevum*, 1997, 66/1, pp. 42-79; *Petrus Alfonsi*, pp. 8-27に拠る。
- (5) シャルル＝エマニュエル・デュフルク『イスラーム治下のヨーロッパ―衝突と共存の歴史』芝修身・芝絃子訳、藤原書店、1997年、pp. 225-240; マリア・ロサ・メノルカ『寛容の文化―ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン』足立孝訳、名古屋大学出版会、2005年、pp. 152-163。
- (6) *Dialogi*, S. 3 (538D-539A): Novi enim bene olim te valere in scriptis prophetarum et verbis nostrorum doctorum, a puericia quoque super omnes coequevos tuos legis relatorem fuisse, et si quis adversarius esset, te illi defensionis clipeum opposuisse, Iudaeis in synagogis, ne a sua umquam fide recederent, predicasse, consocios docuisse, doctos in maius provexisse.
- (7) ドミニコ会士ライムンドゥス・マルティ (1220頃-84年) は、彼を「ユダヤ人たちの偉大なラビ」(magnus Rabinus apud Iudaeos) と呼んでいる (*Pugio fidei*, 3, 685)。Cf. J. Tolan, *op. cit.*, p. 213, n. 16.
- (8) *Dialogi*, SS, 1-2 (537B-538A): ...et baptizatus sum in sede Oscensis civitatis in nomine Patris et Filii et Spiritus Sancti, purificatus manibus Stephani, gloriosi et legitimi eiusdem civitatis episcopi....Hoc autem factum est a nativitate domini anno millesimo centesimo sexto, era millesima centesima quadragesima quarta, mense iunio, die natalis apostolorum Petri et Pauli. Unde mihi ob venerationem et memoriam eiusdem diei et apostoli, nomen quod est Petrus, imposui. Fuit autem pater meus spiritualis Alfunsus, gloriosus Hispaniae imperator, qui me de sacro fonte suscepit, qua re nomen eius prefato nomini meo apponens, Petrus Alfonsi mihi nomen imposui.
- (9) *Ibid.*, S. 2 (538B): ...nomen quod ante baptismum habueram, id est Moysen.
- (10) *Ibid.*, S. 2 (538B): Alii autem vanae gloriae imputabant, et me hoc fecisse calumabantur ob honorem saeculi, eo quod Christianorum gentem caeteris omnibus superesse conspicerem.
- (11) テクストは、*The Works of Gilbert Crispin*, ed. A. S. Abulafia and G. R. Evans, Oxford 1986; Gilbert Crispin, *Religionsgespräche mit einem Juden und einem Heiden*. Lateinisch-Deutsch, übersetzt und eingeleitet von K. W. Wilhelm und G. Wilhelmi, Herder 2005に収録されている。
- (12) Cf. *The Works of Gilbert Crispin*, pp. xxviii, xxxi.
- (13) 序文のテキストと翻訳が、Charles Burnett, *op. cit.*, pp. 63-67に収録されている。
- (14) テクストと翻訳が、J. Tolan, *op. cit.*, pp. 163-181に収録されている。
- (15) ペトルス・ウェネラビリス (Petrus Venerabilis, 1092/94-1156年) の主導により、1143年に達成された『トレド集成』(Corpus toletanum) の翻訳者の一人トレドのペトルス (Petrus Tol-etus) を、ペトルス・アルフォンシと同一人物とする説もある。この点に関しては、cf. Charles Burnett, *op. cit.*, pp. 47-52; *Petrus Alfonsi*, pp. 22-27.

- (16) 邦訳として、『賢者の教え：中世スペイン伝説集』伊藤正義訳，岩波ブックセンター，1993年：『知恵の教え』西村正身訳，溪水社，1993年などがある。
- (17) *Dialogi*, S. 2 (538B): Hunc igitur libellum composui, ut omnes et meam cognoscant intentionem, et audiant rationem, in quo omnium aliarum gentium credulitatis destructionem praeponui, post hec Christianam legem omnibus prestantiorem esse conclusi. Ad ultimum etiam omnes cuiuslibet Christiane legis adversarii obiectiones posui, positasque pro meo sapere cum ratione et auctoritate destruxi.
- (18) *Dialogi*, S. 4 (539C): Hoc etiam, si placet imploro, quod, si aliquam de scripturis auctoritatem attuleris, secundum veritatem Hebraicam hoc facere velis. Quod si aliter facias, me non recepturum esse cognoscas. Sed et ego si aliquam juxta quod apud nos est tibi adducam, et ut eam volo recipias, et quod verum agnoveris, nullatenus contradicas.
- (19) Cf. Petrus Alfonsi, p. 44, n. 12.
- (20) *Dialogi*, S. 4 (539C): Et hoc ergo certe non abnego, tuo namque ipsius gladio occidere te multum cupio.
- (21) 「論題」(Titulus)という区分については、cf. Charles Burnett, *op. cit.*, p. 43.
- (22) Cf. *Dialogi*, SS. 2-3P. L. 版では、この箇所は各「論題」の冒頭に移されている。
- (23) *Ibid.*, S. 1 (537A): Unde perpendimus, et quod intelligendum, et quod inde est credendum...
- (24) *Ibid.*, S. 1 (537A): Unus itaque Christus tribus perfectus substantiis, corpore scilicet, anima et deitate, idem et deus et homo est.; S. 87 (620C-D): Dixi namque tibi in primis in mee explanatione credulitatis tres ipsum esse substantias Christum, corpus scilicet, animam et deum.
- (25) *Ibid.*, S. 86 (619A-B): Sed per imaginem dei, de qua Moyses loquutus est, imaginem illam, id est formam humanam, necesse est intelligamus, quam assumpsit dei filius incarnatus.
- (26) *Ibid.*, S. 62 (597B): Sed cum paternam reliqueris fidem, miror, cur Christianorum et non potius Saracenorum, ... delegeris fidem. ... Semper enim, ... in eis conversatus et nutritus es, libros legisti, linguam intelligis.
- (27) *Ibid.*, S. 62 (597C): Lex est siquidem larga de presentis vitae deliciis multa servans mandata, in quo ostenditur divina circa eos fuisse dilectio maxima, pariterque suis cultoribus gaudia repermittit ineffabilia. Cuius videlicet legis radicem si queras, invenies super inconulse fundamentum rationis fundatam.
- (28) 『ロランの歌』から幾つかの詩句を引用しておく(『フランス中世文学集1』白水社、1990年に所収の神沢栄三訳に拠る)。「神を崇めぬ王マルシルこれ(サラゴッサ)を領し、マホメットに仕え、アポリンを拝む」(1, 7-8):「象牙づくりの王座にありて、マルシルは書一卷を取り寄せたり。そはマホメットとテルヴァガンの法を記たるもの」(47, 609-611):「われらを領ろしめし給うマホメット様、はたわれらの主たるテルヴァガンにアポリン様、王を救い、妃を守り給わんことを」(194, 2711-2713):「太守(バリガン)は勢威盛んなる者なれば、馬前には己が龍旗と、テルヴァガンにマホメットの旗印、邪神アポリンの像をば掲げたり」(234, 3265-3268):「皇帝(シャルル)サラゴッサを抜き給えば、千騎のフランス勢をして城内隈なく、ユダヤ寺院、イスラム寺院を探索せしめたり。おのがじし鉄植なりと手斧なりを手に持ちて、絵姿も偶像もことごとく打ち毀てば、妖術、巫術ことごとく影を潜むらんずらんと覚えたり」(266, 3660-3665)。
- (29) *Dialogi*, SS. 62-63 (597D-C): ... signum est, quod quinquies tantum in die orare eos precepit, quin etiam semper antequam orent, ut perfectam munditiam habeant, culum, veretrum, manus, brachia, os, nares, aures, oculos, capillos decentissime ad ultimum pedes lavant. Hoc facto publica voce preconantur unum confitentes deum, qui nullum vel similem habeat vel equalem, eiusque Mahomam esse prophetam.

- (30) *Ibid.*, S. 63 (597D-598A): In anno quoque mensem integrum ieiunant. Ieiunantes autem nocturno comedunt tempore, diurno abstinent, ita, ut ab ea diei hora, qua nigrum ab albo distinguere per visum poterunt filum, usque ad solis occasum nemo comedere, bibere aut uxoris commixtione se presumat fedare. Post solis autem occasum donec ad sequentis diei crepusculum semper eis cybo et potu propriisque uxoribus, prout cuique libet, liceat uti. Si tamen aut infirmitate quis fuerit pregravatus aut in via erit, quamdiu aut languoris aut itineris duraverit tempus, conceditur ei, quibuscumque voluerit, et vesci simul et uti, sic tamen, ut, quod vel egritudinis vel viae necessitate minus impleverit, postea emendet, quando licuerit.
- (31) 「2雌牛の章」185, 187. コーランの引用は、『日亜対訳・注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会, 1990年に拠る。
- (32) Cf. *Dialogi*, S. 63 (598A) およびコーラン「2雌牛章」125.
- (33) *Dialogi*, S. 63 (598A): Semel autem per singulos annos propter solam recognitionem precipiuntur omnes ire ad dei domum, que est in Mecha videndam, et ibi adorare eamque inconsutilibus tegumentis induti circuire et lapides, prout lex precipit, per media scilicet femora iacere retro pro lapidando diabolo.
- (34) 12世紀後半に、アル・アンダルスからメッカ巡礼を行なったイブン・ジュバイルは、当時の巡礼の様子を克明に報告しているが、足の間から背後に投石するという慣習については全く述べていない（『イブン・ジュバイルの旅行記』藤本勝次・池田修訳、講談社学術文庫, 2009年, pp. 83-245）。
- (35) Cf. コーラン「18洞窟章」31:「43金の裝飾章」71:「47ムハンマド章」15:「55慈悲あまねく御方章」54-58, 70-74.
- (36) *Dialogi*, S. 64 (599B): Haec bona dabuntur credentibus, non credentibus vero deo et prophetae eius Mahometho erit infernalis pena sine fine. Quantiscumque autem peccatis quisque obligatus fuerit et in die mortis suae deo et Mahometo crediderit, in die iudicii Mahometo interveniente salvus erit.
- (37) コーラン「6家畜章」51.
- (38) 井筒俊彦『イスラーム思想史』岩波書店, 1975年, pp. 46, 63-64.
- (39) *Dialogi*, S. 67 (601B): Indicia namque veri prophetae sunt: probitas vitae, miraculorum exhibitio, dictorum omnium firma veritas.
- (40) Cf. J. V. Tolan, Saracens: *Islam in the Medieval European Imagination*, Columbia University Press, 2002, p. 148. 『アル・キンディーの書簡』については, *ibid.*, pp. 60-64.
- (41) 伝統的には、このセルギウスはネストリウス派ということになっているが、ペトルスはこれをヤコブ派としている。このヤコブ派について、本書では「ヤコブ派とはヤコブという名のある人物に因んで名づけられた異端である。彼らは、割礼を説き、キリストが神ではなく、聖霊によって懐胎され、処女マリアから生まれた正しい人に過ぎない信じているが、それにもかかわらず、彼らは、キリストが十字架にかけられたこと、あるいは彼が死んだことを信じてはいない」(Iacobitae autem sunt heretici, a quodam Iacobo dicti, circumcisionem predicantes, Christumque non deum, sed hominem tantum iustum, de Spiritu Sancto conceptum ac de virgine natum, non crucifixum tamen neque mortuum credentes. S. 65 [600A-B]) と述べている。実際のヤコブ派は、カルケドン公会議(451年)のキリストの二性一位格に対して、神性と人性が一致し一つのヒュポスタシス、一つの本性となるとした単性論者(monophysist)であり、キリストの一つの位格におけるヒュポスタシスと本性の二重性を唱えたいわゆるネストリウス派とは異なる。この派の創始者が西シリア教会のヤコボス・バラダイオス(Jakobos Baradai, 578年歿)であるため、ヤコブ派と呼ばれる。またこの派の理論的な基礎を築いたのがアンティオキヤ主教

のセヴェロス (Severos, 538年歿) である。ペトルスの記述は、このセヴェロスをセルギウスと混同したのかもしれない。カルケドン公会議前後のキリスト論については、cf. J. メイエンドルフ『東方キリスト教思想におけるキリスト』小高毅訳、教文館、1995年、pp. 33-81；J. ベリカン『東方キリスト教世界の精神 (600-1700年)』鈴木浩訳、教文館、2006年、pp. 85-154。

- (42) *Dialogi*, S. 67 (601B-C): Bonitas vitae in Mahometo violentia fuit, qua se prophetam dei predicari vi faciebat, furto et rapacitate gaudens et igne libidinis in tantum fervens, ut et alienum thorum fedare adulterio tanquam domino precipiente non erubesceret, sicut de Zanab, filia Ias, uxore Zed, legitur. “Dominus”, inquit “tibi, Zed, uxorem tuam dimittere precipit.” Quam dimissam ipse sibi continuo copulavit. Cf. コーラン「33部族連合章」37.
- (43) Cf. W. M. ワット『ムハンマド』牧野信也・久保儀明訳、みすず書房、1970年、pp. 184-185；N. Daniel, *Islam and the West: The Making of an Image*, Oxford, 1993, pp. 119-120.
- (44) *Dialogi*, S. 67(601C). Cf. コーラン「24御光章」11-14.
- (45) *Ibid.*, S. 67 (601C): De cuius vicii potentia, libidinis scilicet, laudasse deum legitur, eo quod in eo quadragies supra humanum modum habundaret, ...
- (46) N. Daniel, *op. cit.*, pp. 125-129.
- (47) *Dialogi*, S. 72 (605C-D): Sed post mortem ipsius omnes ab ipsius lege discedere voluerunt. Ipse enim dixerat tercio die corpus suum deferendum esse ad celum. Ut vero illum mendacem cognoverunt et cadaver fetere viderunt, inhumato corpore maxima pars discessit. Haly autem, filius Abytharii, quidem ex decem Mahomethi sociis, post mortem ipsius regnum adeptus est. Qui blande predicavit et callide ammonuit ad credendum gentes et dixit illos non bene intelligere Mahomethi sermonem. “Mahometus”, inquit, “non dixit, quod ante sepulturam vel videntibus hominibus sublevaretur ad celum. Dixit quippe, quod post sepulturam corporis angeli eum nescientibus cunctis delaturi essent ad celum. Unde, quia statim non eum sepepulerunt, iccirco fetere incepit, ut statim sepeliretur.” Hac igitur causa gentem in errore pristino parumper detinuit.
- (48) *Ibid.*, SS. 72-73 (605D): Duo fratres, scriptores Mahomethi filii, nomine Hazan et Hozam, ieiuniis et vigiliis fortiter corpora macerantes, pene ad mortem devenerunt. Pater vero eorum sepe filios ammonerat, ne per tam longam macerationem sua fatigarent corpora. Ipse autem videns illos stultos esse et ad mortis ostium pre nimio labore iam devenisse, de Mahometo, uti erat rem, patefecit. Cognita autem nequitia illius a patre ceperunt comedere et bibere vinum et sicut in sua lege fortiter antea perstabant, ita denique legem quamvis non ex toto dimittere ceperunt. Sed et quedam pars gentis istos in consuetudine insequuti sunt.
- (49) *Ibid.*, S. 66 (600C-D) .
- (50) *Ibid.*, S. 66 (600D-601A). Cf. 『ハディース』「人頭税」七 (一).
- (51) コーラン「2 雌牛章」23-24.
- (52) *Dialogi.*, S. 67 (601B): ...loquentem ad se dominum introducit dicens: “Dixit dominus ad me: Ideo te facere miracula non permitto, quia, ne tibi sicut aliis prophetis in miraculis contradicatur, timeo.
- (53) *Ibid.*, S. 62 (597C).
- (54) *Ibid.*, SS. 68-69 (602D-603A): Duo filii Loth, Amon et Moab, hanc domum honorabant, et duo ydola ab eisdem ibi colebantur, alterum ex albo, alterum ex nigro lapide patratum. Nomen quidem illius, quod ex nigro erat lapide, Mercuricius dicebatur, nomen vero alterius Chamos. Alterum, quod ex nigro erat lapide, in honore Saturni, alterum, quod ex albo, in honore Martis erat aedificatum. Bis in anno cultores eorum ad ipsa ascendebant adoranda, ...Quod turificabant

nudi tonsisque capitibus, quae usque in hodiernum diem in India celebrantur, ut dixi. Arabes vero cum Amon et Moab Ydola adorabant. Mahomethus autem, post longum tempus veniens, pristinam consuetudinem nequivit auferre, sed quasi quodammodo more mutato inconsutilibus tegumentis coopertos domum circuire permisit. Sed ne videretur precipere ydolis sacrificare, simulachrum Saturni construxit in pariete, in angulo domus. Et ne facies appareret, dorsum erat tantum exterius positum. Altertum Martis scilicet Ydolum, quia sculptum undique erat, subtus terram et lapidem supra positum misit, hominibus vero, qui ad adorandum ibi conveniunt, lapides istos osculari precepit et humilitatis tonsisque capitibus inter crura lapides retro iactare, qui humiliantes dorsa denudant, quod est signum legis pristinae.

(55) Cf. G. E. v. グルーネバウム『イスラームの祭り』嶋本隆光監訳 / 伊吹寛子訳, 法政大学出版局, 2002年, pp. 18-69.

(56) 『ハディース』「巡礼の書」五〇(一)。訳文は, 牧野信也訳(中央公論社, 1993年)に拠る。

(57) *Dialogi*, S. 69 (603B): In libris illorum scriptum vidi, quia Homar, quidam ex decem sociis Mahomethi, more solito lapides deosculans, sic exorsus est: “Vobis”, inquit, “lapidibus dico, quia nec adiuvere nec nocere potestis scio, sed quia Mahomethus fecit, illius morem exequor.”

(58) Cf. 「民数記」21: 29.

(59) この点について, 詳しくは, B. Septimus, ‘Petrus Alfonsi on the Cult at Mecca’ *Speculum* 56, 3 (1981), pp. 517-533.

(60) *Dialogi*, S. 70 (603D-604A): Quia dei adversarios Mahomethus predari, capitivare, interficere iussit, donec credere vel censum persolvere voluissent, non est hoc ex dei operibus, neque prophetarum quilibet iussit cogere aliquem credere, sed ipse hoc cupiditate precepit pecunia, ut inimicos suos destrueret. Hoc autem, ut nosti, non debet fieri, immo si quis aliquem convertere velit, non per violentiam, sed diligenter et dulciter hoc facere debet, sicut ipse Mahometh in suo testatur Alcorano, sub persona domini ita dicentis: “Si vellet dominus, deus tuus, tocus seculi gentes crederent. Cur ergo, ut credant, cogis? Quia nullus nisi voluntas dei credit.”

(61) *Ibid.*, SS. 70-71 (604B-C): M. Liber Alcorani talis est, ut posterior primum destruat ordinem. P. Alcoranus non manu Mahomethi scriptus est, si enim hoc fecisset, ordinatus esset. Post mortem vero ipsius socii eius, qui secum fuerant morati, quisque, ut ita dicam, lectionem suam renuntians, Alcoranum, composuerunt, unde nescimus, quis prior, quis posterior fuit ordo.

(62) Cf. J. V. Tolan, *Petrus Alfonsi and His Medieval Readers*, University Press of Florida, 1993, pp. 95-131, 182-198.

(63) ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説4』前田耕作・山中知子訳, 人文書院, 1987年, pp. 409-413. この部分は, *Dialogi*, SS. 62-67 (597C-601D) の内容と一致する。